

<b>Title</b>	戦前期新聞研究における読売瓦版・錦絵新聞・小新聞：新聞の大衆性をめぐって
<b>Author</b>	土屋, 礼子
<b>Citation</b>	人文研究. 50 卷 9 号, p.615-634.
<b>Issue Date</b>	1998-12
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部紀要  
第50巻 第9分冊 1998年39頁～58頁

## 戦前期新聞研究における読売瓦版・ 錦絵新聞・小新聞 —新聞の大衆性をめぐって—

土屋 礼子 (社会学教室)

### 1) はじめに

新聞の大衆性、あるいは大衆紙の成立という問題は、新聞研究そのものを導く大きな契機であったにもかかわらず、新聞の歴史的研究においては必ずしも中心的な課題として取り上げられてこなかった。新聞はまず政治過程の一部をなす言論機関として叙述されてきたし、新聞各紙の興亡を述べた新聞史でも、新聞の大衆性は、新聞の商業化の進展過程でより多くの読者を獲得するための方策として、通俗、娯楽、センセーショナリズム、煽情主義、スキャンダルリズムといった非政治性と対になることばで語られてきた。しかし、新聞あるいはニュースの大衆性とは何かと正面切って問うならば、歴史的研究は漠然とした曖昧さを繰り返してきたと言えるだろう。たとえば、明治十年前後に成立した小新聞（こしんぶん）は日本における大衆紙の源流と考えられているが、小野秀雄はこれを「政論本意の大新聞に対し娯楽本位の小新聞」<sup>1)</sup>と定義し、紙面の大小、ふりがなの使用、挿し絵、記事内容、記者階層、読者階層などの指標をあげている。しかし、明治後期に赤新聞と呼ばれた『萬朝報』やあるいは現代のスポーツ紙と呼ばれる新聞群まで視野におさめれば、新聞の大衆性とその指標には時代的な変遷があり、それらを相互に比較し関連づけた考察は、充分に行われてきたとはいいがたい。

こうした事情をアメリカ・ジャーナリズム史の文脈から大井真二は次のように述べている。「センセーショナリズム批判は数多くなされてきたけれども、その実、定義を含めて問題の真剣な究明は意外になされていないのが現

状のようである。基本的な問題を取り上げただけでそうした事情は歴然となる。センセーショナリズムは、ジャーナリズムの規範からの一時的な逸脱現象なのか、ニュースに本質的に内在するものなのか。センセーショナルと指弾される記事の取り上げる題材がセンセーショナルなのか、あるいは扱い方によって、センセーショナリズムの問題が生じるのだろうか。いかなる理由でセンセーショナリズムが批判の対象となるのか。果たして、社会的な効用はあるのか。…少なくとも歴史的なパースペクティブをもった問題の究明はあまりなされていないのではないだろうか。』\*<sup>2</sup> 文中のセンセーショナリズムの語を通俗性やスクランダルリズムと置き換えても問いの実質は変わらないであろう。同時代の良識派からはまず非難の対象として大衆紙は取り上げられ、通俗性を一段低いものとしてみる価値判断から描かれてきた。

一方で大衆紙は新聞の発達史観においては、何らかの発展段階を示す現象として触れられてきた。すなわち政論新聞から営利新聞への進化という見方の中で大衆紙は多数読者を勝ち得た経済的成功例であるが、その大衆性の中身に関する議論は歴史的な視界からどれだけ深められてきたのだろうか。「センセーショナリズムといえば、十九世紀前半のペニー新聞のジャーナリズム、19世紀末のハーストとピュリッツァーのイエロー・ジャーナリズム、あるいは1920年代の英米のタブロイド・ジャーナリズムをすぐに想起するが、それらを相互に関連づけた議論は意外に少ないのである。』\*<sup>3</sup> と大井が指摘していると同様のことが、日本の新聞研究にもあてはまるように思われる。

そこで本稿では、主に戦前の日本における新聞研究を振り返り、新聞における大衆性がどのように考えられ、記述されてきたのかを検討する。特に読売瓦版、錦絵新聞、小新聞という新聞成立期における三つの大衆的なニュース形態に対する評価と位置づけに注目する。ただし、ここでは新聞研究を狭い範囲に限定せず、(1) ジャーナリストによる著述または新聞に対する反省的批評、(2) 江戸・明治時代に関する民間史学、(3) 小野秀雄の下で公式に成立するアカデミックな研究、という三つの側面から追いかけて、戦後にどう接続してゆくかを明らかにしたい。

## 2) 初期新聞史における記述

明治十年代半ば、新聞の政治化とともに新聞の歴史を顧みるまなざしが生まれる。具体的には、新聞史の嚆矢である小池洋二郎『日本新聞歴史』(1882)

が発行されるのをはじめとして、新聞記事にも新聞の歴史に関する叙述がみられるようになる。その中で、読売瓦版を新聞紙ではないがその萌芽として位置づけ、小新聞については読者獲得の面から評価するという枠が設定される。しかし錦絵新聞は全く視野の外に置かれ、新聞の大衆性への言及もほとんど登場しない。

例えば、先に挙げた『日本新聞歴史』は明治元年から14年までの新聞の創刊、筆禍、発行部数などを時系列で列挙した記録であるが、その冒頭には次のように読売瓦版に触れた箇所がある。「新聞紙ノ我日本国ニ始リシハ、文久三年ノ秋…発行セシバタビヤ新聞及ビ六合叢談ヲ以テ濫觴トス。…屈壯ノ売子等ガ、コレハ今度世ニメズラシキ次第ト呼ビテ市街ニ揚言読売セシガ如キハ、稍新聞紙ノ嚆矢ト云フベキモ、其記スル所ハ幕府役人ノ更迭、任免、及ビ暴風、大火、地震、洪水、或ハ喧嘩、鬪殴、復讐、切腹等ノ珍聞奇事ノミニ止マリ、而モ刊行定時ニアラザルヲ以テ、亦未ダ新聞紙ノ体裁ヲ具ヘタルモノト云フヲ得ザリシ也。…」

新聞の起源は欧米新聞の翻訳紙から始まるのであり、読売瓦版は新聞の先行形態ではあるが、不定期刊行で新聞と呼ぶにふさわしい内容も体裁も整えていなかった、という評価である。これは戦後の西田長寿『明治時代の新聞と雑誌』（1961）や春原昭彦『三訂版 日本新聞通史』（1987）にまで共通する認識で、新聞史の枠を規定している。ただし、この中には大新聞小新聞という区分に関する記述はなく、等しく新聞として扱われている。

同じ頃『郵便報知新聞』に掲載された「世界ノ新聞歴史及ビ附論」にも、同様の記述が見られる。これは明治16年4月21日から5月9日まで十二回にわたって連載された無署名の記事であるが、欧米における新聞の歴史から日本での新聞の濫觴と現況までを述べた内容から考えて、当時報知社社長であった矢野文雄が執筆したものと考えられる。その中で読売瓦版は次のように位置づけられている。

「…江戸市中ニ於テ街頭ニ揚言シ「これは此度」ノ発語ヲ以テ種々ノ奇事異報ヲ読売シタルハ久シキ以前ヨリ行ハレタル事ニシテ元禄年間ニ生ジタル事変ニ付キ之ヲ読売シタル事実ヲ記シタルモノアリ若シ之ヲ以テ新聞紙ノ萌芽ナリト云ハバ我国ハ八百数十年前已ニ新聞紙ヲ有スルモノナラン然レドモ余輩ハ決テ新聞紙ヲ以テ我国固有ノ物トセザルナリ即チ一ノ輸入品ナリト信ジ泰西文明ノ輸入ト共ニ我国ニ進入セル物トス…」（第六稿）

読売瓦版と新聞の類似性は、新聞を文明の一環と考える視座によって、時

間的な連続の上に立つ派生的関係を否定されている。ところが、読売瓦版の販売方法を取り入れて出発した小新聞については、「傍訓新聞」と称して次のように述べている。

「…惟フニ明治八年ハ我国新聞紙ニ至大ノ改良ヲ加ヘタル時期ナルノミナラズ新聞事業ノ隆盛ヲ表シタルノ一期限ナリ所謂傍訓新聞ノ如キ読売新聞初メテ顕ハレカノ奇事異報ヲ読ミ売リセル風習ニ由リテ日々刊出ノ新聞ヲ路傍街頭ニ放声売與スルノ例ヲ示シテヨリ同種類ノ新聞相踵テ輩出シ僅カニ仮名ヲ読ミ得ルノ下等人種ニ至ル迄悉ク新聞ナル者アルヲ知ラシメ以テ新聞紙ノ勢力ヲ一般社会ニ拡充スルノ端緒ヲ開キタリ」(第九稿)

小新聞による新聞読者の拡大は、新聞事業の隆盛は文明の尺度であり国勢の指標であるという素朴な文明史観により、積極的に評価されている。しかし、実際には当時小新聞は世間一般からは蔑視と批判の対象となり、学校などで閲読禁止にさえなっていた。これに対し、政党系小新聞を中心に小新聞の改良と擁護論が展開された。<sup>\*4</sup> そのなかで、欧米の大衆紙と比較して小新聞を擁護する論が出てくる。例えば坂崎紫瀾は「小新聞の勢力」と題する論説の中で、1860年代に創刊されたパリの「プーチー、ジョルナル」を“小新聞”と訳して引き合いに出し、政府の言論弾圧政策により文学中心の紙面で評判を高めたこの新聞が、後に政治記事解禁と共に83万部を越える売上高に至った例を述べて、日本の小新聞も「社会の動機たる勢力」となる時が来ると説いた。<sup>\*5</sup> 同時代の欧米での大衆紙の成功は、内容よりもまず読者数に関して見習うべき模範と考えられた。だが、錦絵新聞のような旧来の印刷技術による大衆性や視覚的要素については、全く無視された。

### 3) 初期新聞学における記述

明治三十年代に新聞記者および政治家養成の一部として新聞学が唱えられると、歴史的叙述よりは同時代の欧米諸国の先進的な新聞状況との比較が中心に論じられた。明治後半は英国の新聞が理想とされ、大正期に入ると米国の新聞事業が手本とされるようになる。英国の絵入り新聞や米国のイエロー・ジャーナリズムが紹介され、新聞の大衆性批判の用語として取り入れられるようになるが、読売瓦版・錦絵新聞と関連づけた叙述はほとんどなく、小新聞というカテゴリーすら忘却されたように登場しない。

まず新聞学を掲げた最初の書である松本君平『新聞学』(1899)は、松本

が明治31年神田に設立した東京政治学校の教科講述書として博文館から刊行された。その序で「元来新聞学は、広義に於ける政治学の一部門にして、輓近欧米の学者、漸く新聞に関する科学的研究を為すに至り、既に大学の一課程として、之を講ずるものあり、…誰か新聞記者に新聞学の修養を要せずと云ふや、新聞経営は巨大なる脳力と資本を要する事業にして、科学的知識に俟つに非ずんば経営を美大ならしむる能はず」と述べているように、松本は二十歳前後に渡米して財政経済学等を学んで文学博士を取得、『ニューヨーク・トリビューン』記者となった後帰国し、『東京新聞』などで記者生活を送った経験に基づき、法律学、経済学、国家学、社会学などと並んで官吏・議員・外交官・新聞記者養成のための科目として新聞学を導入した。その内容は新聞社の組織、略記法と探訪記者、通信隊編成、編集事務記者などという項目から伺われるように実務的なものであるが、序論の「近世文明と新聞の福音」が示すように文明の利器としての新聞という枠組みが存続していた。

このうち第28章が「絵入新聞」という項目にあてられ、約18頁にわたって英国の絵入り新聞が詳述されているのは注目すべきである。松本はその前章の末尾で「精巧なる図画を挿入」するのは新聞における第三期の発達であるとし、新聞雑誌は皆読者の目を引くために多くの画工を雇い入れ、この部門を拡張していると述べた後、「日本の新聞紙は紙質の粗悪なるが多きを以て図画に鮮明を欠き充分此部門の利益収むる能はざるも」と断りながら、『毎日』『国民』『都』『時事』『太陽』などの新聞雑誌の図画に短評を加えている。<sup>6</sup>そして絵入り新聞の発達を英国の事例、特に『ゼ、イラストレーテッド、ロンドン、ニュース（絵入倫敦新報）』と『ゼ、グラフィック（画報）』の二大絵入り新聞を「品位高き絵入新聞に成功したるもの」として挙げ、木版と文芸欄の関係が写真版の増加により変化し、それが週刊紙から日刊紙にも及びつつある状況を詳しく解説している。「一般読者著しく増加し、殊に広告の機関として商業者の信用を博したる事」が絵入り新聞の発達した要因であるという分析は、日露戦争以後本格的に離陸する新聞の商業化・企業化に先だち、視覚的要素が新聞の大衆化と結びついた事象であることに言及した点で興味深い。

このような大衆紙に関する肯定的な記述の一方で、この時期すでに米国のイエロー・ジャーナリズムが「黄色新聞」と訳され、新聞の通俗性批判に用いられ始めた。その例として苦米地奥南『新聞小観』（1902）が挙げられる。「新聞とは何ぞや／新聞記者の本務／欧米新聞の概評／我が国新聞を評す／

新聞改善の指針」という構成からわかるように新聞学と新聞批評の両側面を持つこの本の中で、「黄色新聞」は次のように紹介されている。

「米国の新聞は、概して通俗的也。…新聞を以てあまりに営利的事業と見做したる結果、新聞の社会における地位、公共に対する観念等を軽視し、新聞を以てただ「多く売らん」の卑俗的主義の下に置くに至りぬ、されば紙面の趣味を多からしむるを以て唯一の手段となし、事実を尚ぶよりも不可思議なる結構たらしめ、高遠なる理想よりも卑近なる俗的材料を採りて、巧みに世人の好奇心及び嗜好心に投合せむと計るの弊を見る也、殊に彼の所謂「黄色新聞」を以て然りと為す、黄色新聞なるものは、言はば俗的新聞にして、その評論記事を通俗的ならしむといはんよりは、あまりに卑穢軽薄に流がるが如き風を帯び、何んても目ざましき挿画を多く入れ、殺人、放火、窃盗、艶聞等に付き、破天荒の報道を為すに大活字を以て表題を付するが如きは、此の新聞の特色なるべし否其主義とする所なるべしといへども、新聞としては病的なりと評せざるを得ず」(31-32頁)

卑俗な興味に基づく記事、挿し絵の多用、大活字を使った見出しなど新聞の大衆性と視覚性を、営利追求のゆきすぎた結果、本来の新聞事業から逸脱した病的現象とみなす考え方は、後述するように小野秀雄や長谷川如是閑を経て現在に至るまで繰り返される倫理的な評価といえよう。しかし、それが日本の三面記事批判につながる時の歯切れは悪い。

「此等（三面記事のこと…引用者）は勸善懲惡の為め也とはば、如何にも新聞の職務の一つなるべけれど、此の如き汚らはしき記事を以て新聞の本色となし、之を以て俗的味ひをつけ、世人の好奇心に苟合して新聞を多く売らんと計るが如きに至ては、あまり感心すべき事にあらず、これ新聞を以て益々社会を腐敗せしむるものなれば也、世人の嗜好的趣味を低下せしむるものなれば也、尤も艶種、罪惡種といへども少量の掲載は差支無しただ手加減にあるのみ」(50-51頁)

苦米地のこの本は、新聞批評の本には珍しく日本の新聞史に関する記述の中で読売瓦版に触れ、「英国古代の新聞書束（ニュースレッター）」に似たもので、新聞業の萌芽とも見るべきものと述べている（41-43頁）ものの、錦絵新聞や小新聞については全く言及がなく、以後も繰り返される史的な厚みを持たない新聞批判の典型といえよう。

大正期に入ると、杉村広太郎『最近新聞紙学』（1915）、小野瀬不二人『最新實際新聞学』（1915）、吉野作造編『現代叢書 新聞』（1916）、大日本新聞

学会編『新聞学全書』(1919)など、実学としての新聞学を説く書が次々と刊行された。その多くは米国の新聞や新聞学を基盤に新聞の編集や経営方法を述べたものだが、大衆紙に関する記述で注目されるのは、小野瀬の『最新実際新聞学』である。小野瀬は当時夕刊紙『東京毎夕新聞』の主幹として、米国のイエロー・ジャーナリズムに倣った派手な大見出しを導入し、日本の新聞のレイアウトに新風を吹き込んでいた。その実践をふまえた具体的な見出し作成術がこの著書の目玉である。その序文で彼は「殊に最近吾国新聞界の発達は、或点では欧米のそれを凌がうとして寧ろ太だ目覚ましいものがある。これは…実は日本の新聞が道楽であり、何等か他の目的の為め的手段として取扱はれてゐた時代を離れ、正しく一個の純然たる事業となったからである。」と述べ、新聞の企業化を前提に新聞製作を説いてゆく。そこでは新聞の大衆化は当然であり、「標題は如何にニュースを広告するか」といった課題が論じられた。もはや文明の利器としての新聞論ではなく、事業としての技術論が展開された。

このような新聞界の内部から勃興した新聞学を総合しようとしたのは永代<sup>ながよ</sup>静雄である。彼は『東京毎夕新聞』などで記者を勤めた後、新聞業界関係者の協力を得て、大正9年(1920)9月新聞研究所を設立し、翌10月には月刊雑誌『新聞及新聞記者』を創刊、新聞研究会も組織した。<sup>7</sup> その頃ちょうど新聞界は大阪系の二紙が全国制覇を争う商業化が頂点に達しようとしていたが、彼はそのような商業化を進展させるだけの新聞学をめざしたのではなく、社会における新聞事業の質的な向上をはかる新聞研究を構想していた。それは例えば、大正10年『大阪毎日新聞』『読売新聞』等が論説のルビを廃止し、『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』等がグラビア版の付録を発行し、『報知新聞』が漢字制限に踏み切るなどの事象を指して、「新聞の民衆化」がさかんに口にされた時、『新聞及新聞記者』が掲げた社論「日本の新聞は民衆化かモップ化か」にうかがえる。<sup>8</sup>

「近頃よく使われる言葉の中に「新聞の民衆化」と云ふのがある。殆ど一種の流行を作り、読者のハガキ投書を募集する社告に、「吾紙の民衆化」と銘打った大新聞さえもある。…民衆は社会であらねばならぬ。節制あり、統一あり、組織あり、生命ある社会即民衆であるとすれば、日本の新聞は悲しむべし、いまだ多く民衆化していない。多数低級の読者に迎合して愈々黄色式に、無頼無自覚の読者を刺激して益々煽情的なるは無数にある。併しながら彼等の左右しうるはモップのみ、以て民衆を代表すと自称するが如きは僭



越も極まる。…噫、吾儕は滔々たる新聞のモップ化、卑俗化に飽き盡くした。…社会の正しき意志、感情、思想を代表するところに新聞の真の民衆化はある。文化の生きた材料と自由な批判とを盛ること即ち新聞の民衆化である。新聞の民衆化即民衆の新聞化。一言以て蔽へば新聞の生活化、其処に新聞の標準はあり、新聞事業の大団円はある。」

新聞の大衆化に対するこのような姿勢は、月刊誌の三周年記念事業の一つとして開催された「新聞学講座」にもみられる。大正11年11月1日から8日までの八日間、全国から234名の参加者を得たこの講座の内容は、『新聞学研究講座速記録』（1923）という豪華本にまとめられた。それによれば、「組織学／論説学／取材学／記事編集学／通信機関学／経営学／広告学／販売学／工場学／副業学／新聞紙法学」などを業界の第一線で活躍する人物が講義しているが、その締めくくりに、営利主義を否定し公共奉仕を唱える「新聞倫理学」が登場し、しかもその講師が小野瀬不二人であるのは注目すべきであろう。

新聞の大衆化に対する倫理的な規制という問題は、同時に国家の介入という方向をはらんでいた。永代が内相官邸で開いた第一回新聞研究会における論題の一つが、危険思想および国民教化の問題であったように、新聞研究はもはや新聞事業拡大のための技術論だけにとどまっていることはできなくなってきた。

#### 4) 民間史学の流れ

初期新聞学がもっぱら業界人による新聞先進諸国からの最新情報の紹介であり、新聞事業の興隆を目指していたのに対し、関係者の記憶の中で忘却されてゆこうとする日本の新聞自体の歴史を掘り起こし書きとどめようとしたのは、新聞業界やアカデミズムの外にいた民間史学者たちであった。彼らは現物を買集めて蒐集保存するコレクターであり、古老から幕末や明治時代の昔話を聞き取って記録する好事家でもあった。

その筆頭に石井研堂を挙げるのが適切であろう。彼は明治41年(1908)『明治事物起原』を刊行するにあたって、その巻頭で「明治二十年の夏なりき。著者不図せしことより、当時に盛行する人力車写真新聞紙の起原を尋ねんことを思ひ立ち、資料の集録を勉めたりき」と自らの研究の動機を述べている。14分類332事項が収められたこの初版本では、幕末・明治初期の新聞に關す

る「新聞紙の始」「新聞に広告の始」「記者の熟字の始」「従軍記者の始」「新聞縦覧所の始」の五項目が彼のコレクションをもとにつづられている。これらは当事者の回顧録や回想記ではない形での初期の日本の新聞に関するまとまった記述として、最も早いものである。その特徴は読売瓦版と近代的な新聞の断続性を、日本社会の歴史の一面として捉えようとする見方である。

こうした視点は朝倉亀三『本邦新聞史』(1911)にも共通している。「本書は其前編に於て、本邦新聞紙創刊以前の時代に於ける其類似物たる童謡、落書、読売瓦版等の起原及び其変遷を述べ、後編には本邦の新聞史の起原より、明治十年に至る変遷を叙したるものなり」と緒言にあるように、初めて読売瓦版を新聞史に織り込んだ本であり、実物複写入りで読売瓦版を本格的に叙述した最初の書であった。また、新聞史において初めて「小新聞」の語を採用したのもこの著述であった。それは次の箇所である。

「…時事問題を通論せる社説を掲載し、振仮名を附せざる新聞紙を世に大新聞と呼び、俗談平話を主として総振仮名を施したるものを小新聞と称せり、小新聞の起源は、明治六年一月廿五日創刊の『東京仮名書新聞』同年二月十五日創刊の『まいにちひらかなしんぶんし』等に発す」(40頁)

さらに絵入り新聞および新聞小説の源流として『平仮名絵入新聞』に言及したり、演劇との関係や配達人の出で立ちに触れたり、およそ新聞を西洋文明の輸入物と見る観点からはこぼれおちてしまう新聞をとりまく細かな風俗的事象がすくい上げられている。ただし、『明治事物起原』初版本と同様に、錦絵新聞に関する記述は出てこない。

ところでこの書は、宮武外骨が大阪で発行していた雅俗文庫の一冊として刊行された。緒言に「本書編纂に際し、宮武半狂氏は其所蔵の古新聞紙を挙げて恵贈せられ、又市島春城氏及び永田有翠氏は其所蔵の古新聞を貸与せられたり」とあるように、宮武外骨、市島春城などの蒐集品が基礎資料となっていることがわかる。朝倉や市島がいつから読売瓦版や古新聞の蒐集を始めたのかははっきりしないが、外骨の場合はおそらく骨董屋を営んだ明治30年前後からであろうと推測される。こうしたコレクターたちの収集資料に基づく新聞史は、ありうべき新聞を追究する新聞学とは別の所で、実際に日本の新聞が築かれていった現場の証言を拾い集め、新聞の大衆性に対する別のまなざしを構成しつつあった。

こうした民間史学の流れは、吉野作造を要として大正13年11月発足の明治文化研究会に統合されてアカデミズムと接触し、新聞研究に大きな足跡を残

した。雑誌『新旧時代』や『明治文化全集』の刊行、あるいは東大法学部明治新聞雑誌文庫の設立という形で豊かな実りをもたらしたことは改めて言うまでもないが、研究会の中でも新聞に特に大きな関心を寄せていた石井研堂、宮武外骨、小野秀雄、尾佐竹猛の著作の中にもその影響が認められる。例えば石井研堂は、『明治事物起原』増訂版を大正15年10月に刊行する。彼自身が記しているように、明治文化研究会の発足に刺激されて刊行されたこの本では、初版の約四倍半に膨れ上がった記述の中で、「文芸及び新聞紙」が全22分類の一つとして独立し、そこに収められた85事項の内、直接新聞に関する項目が67を占めた。その中には「昔の読売」のように記述が縮められた項目もあるが、「錦絵新聞」の項目が初めて現れ、「日新真事誌」「明治十年代の新聞雑誌」「英国発行の大西新聞」「居留地の外字新聞」などの各新聞を取り上げた記事や「記者の詰所」「新聞売子の風俗」などが加わり、資料の写真複写が掲載されて記述量も大幅に増えた。後の昭和19年の増補改訂版では、「新聞雑誌及文芸」169事項の内、新聞関係は87事項とさらに拡大したが、そのうち約50項目が増補版と共通しており、明治文化研究会によって促された飛躍の大きさを示している。

## 5) 小野秀雄の登場

以上に述べてきた新聞界による新聞学と民間史学による新聞史を統合し、アカデミックな新聞研究を大学制度の中へ確立しようとしたのが小野秀雄である。彼によって初めて読売瓦版・錦絵新聞・小新聞はそろって日本の新聞史上に位置づけられ、同時に欧米の新聞史と精密に比較検討されるに至った。

彼は最初コレクター的な興味から新聞研究に踏み出した。それは彼が雑誌『日本一』を編集していた大正4,5年頃に遡る。「私が新聞の歴史に興味をもって、新聞の記念号や雑誌などで断片的な記録を探し出したのは大正のはじめであった。それがこうじて実物を見なければ承知ができなくなり、古新聞のファイルを図書館のごみの中から探し出したり、古本屋に高く売りつけられたりしてできるだけ実物について歴史を調べだした。」<sup>9</sup> 大正5年夏に戸川残花氏宅で読売瓦版を見たという記述があり、<sup>10</sup> 大正2年まで彼が勤めていた『萬朝報』の横浜支局長・曾我部市太に収集の協力を仰いだりしながら、その頃には古書店通いを始めていたと考えられる。回想録によれば、「…ある時、お成り街道（旧黒門あたりの電車通り）を歩いていると、二、三軒の

絵草紙屋が見つかった。そこで私は、『東京日日新聞』と横書きの題字のある錦絵を発見した。それを買ったのが縁になって、新聞のかたわら、瓦版をも収集することになった。』<sup>\*11</sup> というのが、錦絵新聞と出会い、読売瓦版と共に収集するきっかけであった。古新聞、錦絵類は高かったが、読売瓦版類はただのように安かったと彼は述懐しているが、『東京日日新聞』社会部記者となって月給90円もらっていた時に「大坂阿倍之合戦之図」を三十円で購求したというから、その傾倒ぶりは並ではなかった。大正8年に三菱財閥の岩崎小弥太男爵から奨学金月額五十円を受けて、東大大学院に入学してからもコレクション熱は続き、翌大正9年4月に行われた東京日日新聞社主催の春季皇霊祭十代先覚記者追悼会に福地信世、尾佐竹猛などと共に陳列品を出している。その記録によれば、小野は「中外新聞、江湖新聞、日新真事誌、全盛時代の先覚記者（錦絵）、台湾征伐に従軍せる岸田吟香の図（東日絵付録）」<sup>\*12</sup> を出品しており、すでにこの時点で錦絵新聞を含む初期新聞類を所持していたのがわかる。

この大正9年から昭和4年に東京大学文学部に新聞研究室が設立されるまで、およそ10年にわたってアカデミックな新聞学を確立させようと小野は奮闘した。最初彼は東京日日新聞社の支援の下で本格的な新聞研究に着手した。例えば新聞研究会を新聞社内に組織し、非売品の小冊子『新聞研究』を大正9年4月から発行したが、これは3号で終わった。また大正11年8月に出版された『日本新聞発達史』は東京日日新聞社の五十周年記念事業として依頼された著作であった。しかし、新聞学及び新聞学科調査のため大正12年7月から約一年間欧米へ視察に出かけてからは方向を転換し、新聞業界ではなく大学の中に新聞学の拠点を求めた。大正13年11月に発足した明治文化研究会に参加し、翌年2月から刊行された雑誌『新旧時代』には「日本新聞史」などを寄稿し始めた。大正14年末には独自に新聞学研究会を創設し、翌年1月からは機関誌『新聞学研究』を創刊した。「日本に新聞学を紹介した最初の雑誌」と後に小野が自負して語っているこの雑誌は、彼が翻訳したと思われる論文と彼自身の論文で構成されており、ほとんど彼が一人で作成していたと思われる。その中で彼は建設中の学問である新聞学を社会科学の一部として、また日本学の一部として位置づけた。彼は次のように述べている。<sup>\*13</sup>

「我国の学問は殆んど全部欧州に於て研究されたる既成科学の輸入であった、最近に至って、或は資料を内地又は東洋にもとめ、或は研究所を特設して洋学に対して日本学の基礎ようやく樹立せんとするの傾向を生じました、

我国の学問が世界的に功献するのは、最近以後のことであって吾々学に志す者の快とする所であります。新聞学の研究は此意味に於て日本学の一部分であります、欧州の新聞研究が埃及希臘の古へより開始せらるるが如く、日本の新聞研究は日本及支那の開国より着手されなければなりません、60年以前に輸入されたる現代の新聞紙は、欧州文明の移入によって得たる物質文明の影響により、其マテリアルを改めただけであって、学としての研究は寧ろ其以前に意義ある研究的対象物を有するのであります、加之六十年間に於ける我国新聞の歴史は欧州の新聞紙が二百年を費したる経験の縮図を見るが如きものであって、これまた我々に豊富なる研究資料を提供するのであります、故に吾々が欧米諸学者の研究を涉獵するは、単に其準備であって吾々の本領とするところではないのであります。」

このような視点において、彼は読売瓦版・錦絵新聞・小新聞をともに新聞史に織り込んだ。その中で最も安定した取り扱いを受けているのは読売瓦版で、『日本新聞発達史』(1922)から戦後まとめられた『かわら版物語』(1960)まで一貫して、徳川期の新聞類似物としてヨーロッパにおけるニュースレターやコラントなどの不定期刊行物と比較して述べている。これに対して錦絵新聞の位置づけはやや曖昧である。彼は『日本新聞発達史』の中で「錦絵新聞の流行」の項目をたてて、初めて錦絵新聞を新聞史に織り込み、さらに「我が国初期の新聞とその文献について」という論文で、大衆向きの東京土産として発行された東京の「新聞錦絵」に対して、大阪ではニュース報道の機能が強く「純日本式のグラフィック」であり「錦絵新聞」だと東西の差を分析した。<sup>14</sup> にもかかわらず、戦後出された『日本新聞史』(1947)、『日本新聞史』(1949)、『新聞の歴史』(1955)では、錦絵新聞の記述は全くみられない。ところが、日本新聞協会が編纂した『地方別日本新聞史』(1956)で、小野が担当した「大阪府新聞史」の中に「錦絵新聞の続出」と題した記述が出てくる。<sup>15</sup> さらに、小野の最後の著書となった『新聞錦絵』(1972)は、錦絵新聞に関する初めての専門書で、カラー印刷による美術書仕立てではあったが美術的価値とは異なる史的価値を説き、主に『東京日日新聞』の錦絵新聞を紹介した。そのはしがきで彼は、錦絵新聞を最初に取り上げたのは自分だと自負している。確かに、この書のなかでも錦絵新聞のもとになった新聞記事との対照を行うなど、新聞史に取り上げて錦絵新聞への注目を促した功績は大きいですが、その記述は新聞一般の大衆性や視覚性に関連づけるまで踏み込んではいない。

小新聞への言及は、小野における新聞の大衆性に対する評価のゆらぎをみせている。例えば、『日本新聞発達史』では「所謂小新聞の創刊」という章をたてて、15頁ほどにわたって小新聞の特色と起源、発展の経過を論じているが、そこでは小新聞を娯楽本位の新聞と位置づけながら、読書力の低い階層に読者を広げた歴史的な意義を肯定している。しかし『新聞原論』（1947）では、小新聞は新聞の卑俗的傾向の元祖として描かれる。<sup>\*16</sup>

「…併しながら「新聞は読者のためのみに製作されるものである」といふことは、読者が生活を営むために必要欠くべからざる報道や意見を取扱ふといふことであって、その範囲を越えることは必要のないことであるばかりでなく、新聞のなすべき事ではないのである。然るに右の範囲を脱して読者のために新聞をつくるにあらずして「読者の無差別欲望」に阿諛し、発行者の私利のために新聞を作る悪風が新聞界に流行するのである。しかも此悪風は世界各国共通の現象である。…我国に於ては此種新聞の発生は明治八年頃迄遡ることが出来る。…政論に関心無き読者を対象とする所謂、小新聞なるものが発生した。其元祖は読売新聞にて、謂はば政論を抜きにせるニウス解説式の新聞であった。所が其後に発行された小新聞は、恋愛、殺傷等興味本位の記事に主力を用ひて大衆の悪趣味に迎合した。…この種の新聞はまた実話風の続物や小説を絵入りで掲載した。これ皆読者に迎合する為めにて其内容極めて卑俗であった。…」

この後数頁にわたって彼は『萬朝報』や三面記事、大正中期の特種競争、あるいは欧米のイエロー・ジャーナリズムなどの具体例を縷々述べ、これら新聞の本質的使命に属さない記事を青少年への悪影響を防ぐためにも自粛せねばならないと説く。では、なぜこのようなセンセーショナルリズムが新聞には絶えないのかについての突っ込んだ議論はなく、彼の倫理性高い規範的新闻学と実証的な新聞史における大衆紙の記述との間にある落差は、理論的には埋められていない。

## 6) 新聞の展覧会

新聞研究そのものではないが、新聞の大衆性および視覚性を歴史的に顧みるまなざしを構成した場として、ここで新聞の展覧会に注目しておきたい。戦前に行われた新聞の展覧会は調べた限りでは9回あるが、これまでみてきた新聞界と民間の収集家、そして大学とが協力し、実物の陳列による新聞史

を一般の人々に提示している点で、新聞研究に少なからぬ影響を与えたと考えられるからである。

欧米では新聞博覧会が1885年に開催されたとの記事があるが<sup>\*17</sup>、日本における新聞の展覧会は内国勸業博覧会への新聞の出品を除いて、もっぱら新聞を対象とした展覧会が開かれたのは、大正5年(1916)の新聞展覧会である。これは日本電報通信社が創立十五周年記念事業の一つとして東京上野公園桜ヶ丘美術協会会館で11月25日から12月1日まで開催したもので、「日本における新聞展覧会は今回の電通主催を以て嚆矢とする」と宣言された。<sup>\*18</sup>「貴紙初号若くは注意すべき記念号ならびに本年十一月三日発行の貴社新聞一葉／創立者又は創立当時の主筆記者の写真(なるべく当時の写真)／創立者の書画又は遺著遺品／貴社に特別の功勞ありし人の写真／その他苟くも新聞に関係あるものにして、逸すべからざるもの」という条件で全国新聞社に出品を依頼して集められた1790点が観覧無料で展示された。その目録によれば、『バタビア新聞』一号を曾我部俊治が、「維新時代発行新聞各種」を石井研堂が出品している。また「仇討ちもの、火事報道」などの読売瓦版を帝国図書館と杉本正太郎が、「絵入新聞錦絵他十七点」を高畠和雄が提供している。この他、従軍記者の携帯品、や販売所看板、活字組版(築地活版所)、写真製版順序(中外写真通信社)、新聞紙製造順序(王子製紙)、木版彫刻道具一式(堀野作次郎)なども展示されたと記録されている。この展覧会の反響は、新聞報道に見る限り、あまり大きくはなかったらしい。<sup>\*19</sup>

次に開かれたのは、大阪電報通信社の十五周年記念事業として開催された新聞博覧会で、大正9年(1920)3月14日から5月18日まで大阪市天王寺公園で行われた。前年末に発表された「新聞博覧会開催趣意書」には、「本邦ニ於テ邦字及外字新聞並ニ海外ニ於テ発行セラルル法人経営ノ新聞ノ沿革及現状、新聞広告界ノ大勢、新聞広告ヲ利用スル産業発達ノ状況新聞製作ニ関ル機会及用品発達ノ現状、世界新聞界ノ概況等ヲ紹介シ新聞ニ関スル知識ノ普及ニ新聞事業ノ発展ヲ図ル事ヲ目的」とすると唱っただけあって、その規模は新聞の展覧会として最大であった。<sup>\*20</sup> 陳列館は新聞館、産業館、新聞材料館、参考館の四つからなり、新聞部では全国357新聞社から提供された新聞紙や写真が展示され、産業部では森下仁丹、桃谷順天堂をはじめとする160社の新聞広告が展示され、また雑貨の即売も行われた。新聞材料部ではインク、活字ケース、輪転機などが置かれ、新聞製作の実況が示された。参考品部には、逓信省および大阪朝日新聞社の出品と外国の新聞雑誌、そして「我

が邦に於ける新聞の沿革を示すべく新聞紙の前身とも云ふべき読売瓦版より現在に至る各種新聞雑誌、付録等を年代順に陳列」した。参考品部の出品者170名、出品点数3523点の中には、石井研堂「ジャパン、ポンチ外三十件」や曾我部俊治「バタビヤ新聞外三百二件」のほか、住吉理三郎と西村新兵衛による錦絵新聞、前田敦による「大阪今昔大火三件」の読売瓦版の出品が確認できる。入場料は平日20銭、日曜祝祭日を40銭と設定されたが、公会堂や音楽堂での余興、市立動物園も見られるためか、会期78日間での一般入場者数は総計33万人を超え、一日平均約四千となり、大正元年の拓殖博覧会以来の数字を記録したという。関西の各紙は自社の出品を中心にこの博覧会を報道した。<sup>\*21</sup>

大正15年(1926)9月15日から11月14日まで開催された産業文化博覧会の一部として催された新聞館の展示は、さまざまな意味でそれ以前と以後を区切る分水嶺であったと思われる。一つは広告会社・電通が新聞社を統合する形で行われた前二回の展覧会に対し、これは中外商業新聞社の創立五十年記念の企画であり、また小野秀雄をはじめとする明治文化研究会の支援を受けて行われた点で、それ以後の展覧会につながるものである。また、関東大震災によって、出品者の顔ぶれがほとんど一新してしまっているのも大きな要素である。だが、最も目立つのは錦絵新聞に代表される新聞の視覚性への傾斜である。

産業文化博覧会は東京上野公園不忍池畔に、本館、南洋館、朝鮮館、経済館、新聞館という会場を設営し、植民地を含めた日本の産業の全容を誇示する構成になっていた。新聞館はその中で197坪を占め、付属印刷工場20坪を併設し、その階上は貴賓室にあてられた。<sup>\*22</sup> 新聞館の展示は主に、「『中外商業新報』の過去と現在／新聞が読者に渡るまで／本邦新聞発達の大観／印刷実演」といったテーマに分かれ、そのうち新聞の歴史に関する陳列は「小野秀雄氏宮武外骨氏、吉野作造氏等新聞研究の権威と維新史料編纂事務局等の熱心なる援助」を受けた。<sup>\*23</sup> この中で読売瓦版と錦絵新聞が多数出品され、特に「世態様々」というコーナーでは読売瓦版約四十種、錦絵新聞約五十種が展示された。あわせて「漫画家の見た政治家の顔」という特集が設けられ、新聞の挿し絵や新聞広告も展示された模様から、以前にみられた新聞の歴史を築いてきた先人を偲ぶという要素が失われ、見て楽しむ見せ物としての新聞という側面が浮かび上がってきたのがわかる。

この後、開催された四回の展覧会はいずれも東京帝国大学構内で行われた。



昭和2年(1930)6月18日の明治初期新聞雑誌図書展覧会は、東京帝国大学法学部主催で、実質は明治新聞雑誌文庫(展示当時は保存館とも呼ばれていた<sup>\*24</sup>)の収蔵品のお披露目であった。目録には本山彦一をはじめとする寄付者と寄付品が記録されているが、陳列品はその三十分の一に過ぎなかったという。<sup>\*25</sup> 昭和5年(1930)11月24日から27日まで帝国大学新聞社十周年を記念して開催された内外新聞発達史料展覧会は、「其明治時代の新聞は明治文庫の蔵品を主として陳列し、欠けたのは帝国大学図書館の蔵品及び小野秀雄氏の蔵品で補充した」<sup>\*26</sup> 日誌類、大新聞小新聞、色紙の新聞、ポンチ類、号外、錦絵新聞などが展示され、「三日間の来観者約四千人、過半は大学生であったが、学者名士貴族富豪の来観者も二百名以上あり、秩父宮様の御見学もあった」<sup>\*27</sup> という。この展覧会について宮武外骨は、「新聞紙の使命とか価値とか云ふ事は、其内容記事の如何にあって其形式には拘わらないのである、然るに展覧会といふものは、単に其形式のみを示して「陳列品に手を触れるべからず」で内容記事の通読を許さないのである、これでは其発達の経路を察し内容の良否を知ることは不可能であるらしいが、単に其形式だけを見ても、それを察知し得るの慣例があるので、展覧会の必要が起るのである…要するに展覧会は来観者に観念を得せしむるのみで、実物展読の動機を与えるに過ぎない」と皮肉な意見を書き残している。<sup>\*28</sup> 昭和8年(1933)には、5月に法学部学友会緑会の主催で古珍新聞展覧、11月に帝国大学新聞社五百号祝賀記念として明治大正新聞展覧会が催された。前者では、日刊新聞の創刊号や明治末までの新聞とともに三都の錦絵新聞が陳列され、「来観者の若い者や婦女子は、モノ珍し気に書入文句をも読むのでいつも押すな押すなの販ひであった」と宮武は記している。<sup>\*29</sup> また後者の展示でも、明治大正期の新聞の年代順の陳列に加えて、「景物として錦絵新聞数百枚」が加えられ<sup>\*30</sup>、『帝国大学新聞』五百号では二頁にわたって錦絵新聞の写真複製が特集された。

大阪朝日新聞社が二万号を記念した世界新聞文化博覧会は、昭和12年(1937)4月1日から20日まで大阪朝日会館で開催された。『大阪朝日新聞』二万号までの年譜や世界通信系統と朝日新聞社通信網、写真製版、グラビヤ印刷、国際電話、写真機の変遷など、朝日の企業力を示威する展示が主体であったが、「新聞界物故先覚者」「新聞の黎明期」という歴史に関する展示も設けられた。その出品者には、尾佐竹猛、出雲寺敬豊、藤原恵、新屋茂樹など戦後も活躍するコレクターたちが顔をそろえている。この博覧会を報じた記事では錦絵新聞が「新聞引札」という名称で写真入りで紹介され、当時印

刷技術の最先端として注目を浴びていたグラビヤ印刷と関連づけて、「毛彫やキララ刷りの細かい技巧を江戸時代の夢そのままに残しながらニュース錦絵として誕生した新聞引札は…“見る新聞”の鼻祖である」と説明された。<sup>31</sup>

戦前期最後の新聞展覧会は、昭和14年(1939)福井市のだるま屋という百貨店で開かれた。主催したのは福井文化研究会・新人社という雑誌発行社で、宮武によれば「境新呉服店主人の蔵品を主として陳列し、福井市内の新聞社及び大阪新聞名古屋新聞等の支局が援助」した展覧会であった。<sup>32</sup> 展示内容は、「我邦にて発行されたる新聞／福井にて発行されたる新聞／新聞に現れたる著名事件／錦絵新聞／各種号外／新聞文化に関する文献／先覚新聞記者に関する蒐集／日清・日露戦役錦絵／各新聞社の出品（活字鑄造機、号外印刷発行、新聞社機構解説、小説及び挿絵原稿、ジオラマ及びニュース写真等）」で、このうち錦絵新聞は二十種約六十枚陳列された。出品には、尾佐竹猛、石井研堂など明治文化研究会を中心とする収集家が協力した。3月6日から12日までの七日間で約2万2千人の入場があったという。<sup>33</sup> この数字は、新聞の展覧会が地方においても少なからぬ関心と呼んだことを示している。

このように振り返ると、新聞の産業としての成熟がこうした展覧会を可能にしたと同時に、文明としての新聞という神話をいったん大衆に開かれた形で解体し、新聞が導いてきた自らの歴史としての近代を問い直すまなざしが、人々の間に共有されていたのが感じられる。このまなざしを背景に1920年代から1930年代にかけての新聞研究はかつてない高まりをみせたのである。

## 7) おわりに—1930年代ジャーナリズム研究

大学制度の中に新聞学が定着し始めた昭和5年(1930)に内外社から発刊された『総合ジャーナリズム講座』によって、新たな新聞研究の地平が開かれた。端的に言うならそれは、雑誌や写真、ラジオといった多用なメディアを含むジャーナリズム研究の始まりであり、社会の中でマスメディアはどうあるべきかという、戦後のマスコミ研究に接続する問題意識をはらんでいた。社会主義思想の影響を受け、日本の新聞研究が資本主義批判に最も鋭く接近した時期といってもよい。こうした1930年代のジャーナリズム研究を代表するのが、長谷川如是閑と戸坂潤である。この二人の思想に深く立ち入って議論する余地はここではもはやないが、新聞の大衆性について彼らが提示した

対照的な論を素描しておこう。

長谷川は『総合ジャーナリズム講座』に収められた「ブルジョア・ジャーナリズム」と題する論文の中で、資本主義による商品化が新聞紙本来の性質をゆがめていると論じた。そうした商品新聞は明治十年代の「『絵入新聞』又は『振り仮名新聞』といはれた」小新聞に起源を持つが、「今日は全部の新聞が『振り仮名新聞』になっていることによって、おのずからすべての新聞史の商品化したことを示している」と彼は断ずる。本来は「対立的群意識」によって新聞の勢力は担われるのだが、資本主義商品としてはそうした対立的群意識はじゃまであるから、不偏不党や厳正中立が叫ばれる。それにとどまらず「新聞資本主義による新聞紙は、社会的感覚に代って大衆を引きずることの出来る力をもつ新聞紙を製造しようとする。所謂『黄色』新聞紙がそれである。…活字の大小、組方、挿絵その他によって、視覚に訴える方法の発達しているのもそれがためである。」<sup>\*34</sup> 長谷川は新聞を元来資本主義になじまない手工芸品的性格を持つものと考え、商品化を病いととらえ、視覚的手段の発達もそれに付随すると論じたのである。

これに対し戸坂は、『現代哲学講話』(1934)の中でイデオロギー機関としての新聞を問題とした。彼は明治初期の大新聞を政治新聞、小新聞を市井新聞と呼び、「元来政治的であった世論が、政治的なものから市井的なものへ移行したのが、今日の所謂ジャーナリズムである」と論じ、新聞の商品化によるセンセーショナリズムと検閲制度は、ブルジョア新聞の本質に属すると規定する。「報道が単なる報道のための報道として強調され、所謂報道価値が報道の実質的な使用価値から抽象されると、それがかのセンセーショナリズムとなる。…報道(News)の機能を新聞紙が誇張することは、批評(Views)の機能をそれだけ制限することである。だから新聞出版企業が資本主義的に発達し、その経営形態が資本主義的に合理化されて来れば来る程、新聞紙に於ける批評の位置は低められる。…批評はセンセーショナルな感傷的記事に全く圧倒されて了う。…そうしないと事実、新聞紙は売れないのである。」「そこで報道の商品化—コンマーシャリズム—から必然的に出て来なければならなかったセンセーショナリズム乃至黄色調を、出来るだけ—コンマーシャリズムを破壊しない程度に—、制限するということが、新聞人の道徳的義務だということになる。」<sup>\*35</sup> 彼によれば新聞の倫理化運動は資本主義制度内における資本主義的発達の矛盾の現れととらえられたのである。

新聞の大衆性はこのように、1930年代ジャーナリズム研究の中で新聞の商

品化の問題として把握されるに至った。同時に小新聞の通俗性、錦絵新聞の視覚性とその先駆的事例として浮かび上がってきたのである。このような歴史的認識をふまえた問題意識は、戦後のマスコミ論、あるいは大衆社会論等の中でどのように受け継ぎ、展開されたのであろうか。この課題はまた稿を改めて検討したい。(了)

## 注

- \* 1 小野秀雄『日本新聞発達史』1922, 東京日日新聞社・大阪毎日新聞社
- \* 2 大井真二「センセーショナルリズムを考える—アメリカ・ジャーナリズム史の文脈から—」(『マス・コミュニケーション研究』43号, 1993)
- \* 3 大井真二, 前掲論文。
- \* 4 成島柳北「○新聞の大小とは何ぞ」(『絵入朝野新聞』1883-5-14), 藤田茂吉「祝詞」(『改進黨』1884-8-3), 無位真人「東京小新聞記者の地位」(『自由燈』M18-9-1)などの小新聞論がこの時期に出ている。詳しくは拙論「明治十年代後半の小新聞の変貌」(『メディア史研究』第8号掲載予定)参照。
- \* 5 無位真人「小新聞の勢力」(『自由燈』1885-9-25)
- \* 6 松本君平『新聞学』(1899 博文館) 210頁
- \* 7 永代静雄の業績については, 山本武利「『日本新聞年鑑』と永代静雄」(復刻版『日本新聞年鑑』1986, 日本図書センター, 第19巻所収)参照。
- \* 8 『新聞及新聞記者』3巻3号(1923年3月) 2-3頁。
- \* 9 『新聞の歴史—瓦版から輪転機時代まで—』1955, 同文館, 序1頁
- \* 10 小野秀雄『新聞研究五十年』1971, 毎日新聞社, 100頁
- \* 11 前掲『新聞研究五十年』100-101頁
- \* 12 小冊子『大正九年春季皇靈祭當日の追悼記念会—先覚十代記者小伝』(1920年4月発行, 非売品) 1頁。
- \* 13 「新聞学研究会の創設について」(新聞学研究会『新聞学研究』一号, 1926年1月, 所収) 3-4頁
- \* 14 「我が国初期の新聞とその文献について 一四 新聞錦絵と錦絵新聞」(『明治文化全集 第四巻新聞編』1928, 日本評論社)
- \* 15 『地方別日本新聞史』(1956, 日本新聞協会) 291-292頁
- \* 16 『新聞原論』(1947, 東京堂) 69-78頁参照。
- \* 17 「○新聞紙博覧会 本月は仏京巴里に於て万国新聞博覧会なる者を開き各国に於いて発兌する日々新聞を初め各種定時刊行の雑誌類迄一々其の見本を集めて諸人の縦覧に供するよし同会には欧米諸国の新聞は勿論土耳其, アラビヤ, 支那, 印度, ヘブリウ, 其の他の国語を以て綴りたる新聞紙も出品するを得るの定めなりと云へり」(『改進黨』1885-3-6)

- \* 18 『日本電報通信社史』(1938), 91-104頁。以下の展覧会の出品記録等もこれによる。
- \* 19 『時事新報』と『国民新聞』に小記事が掲載されているのが確認できたのみである。
- \* 20 以下の新聞博覧会に関する記述は、『創立十五周年記念 新聞博覧会報告』(1920, 大阪電報通信社)による。
- \* 21 『大阪朝日新聞』(1920-3-22,5-1), 『京都日出新聞』(1920-3-15,16,22)など。
- \* 22 『産業文化博覧会案内』(1926年9月)の記述による。
- \* 23 以下の展示内容の記述は,「博覧会巡見記—新聞館(1)~(4)」(『中外商業新報』1926-10-11~14)による。
- \* 24 『帝国大学新聞』(1927-6-6)には,「明治時代新聞雑誌保存館が主となり…大講堂で展覧会」とあり,また展覧会目録にも「保存文庫」と記されている。
- \* 25 「明治初期新聞雑誌図書展覧目録」による。
- \* 26~28 『公私月報』4号
- \* 29 『公私月報』33号
- \* 30 『公私月報』38号
- \* 31 『大阪朝日新聞』(1937-4-15)
- \* 32 『公私月報』101号
- \* 33 『新人』特集号 新聞文化展覧会誌, 1939年6月, 新人社
- \* 34 長谷川如是閑「ブルジョア・ジャーナリズム」(『総合ジャーナリズム講座』第一巻1-13頁, および第二巻1-20頁, 1930)
- \* 35 戸坂潤「新聞現象の分析」(「現代哲学講話」第三篇, 『戸坂潤全集』第三巻所収, 1966, 勁草書房, 118-144頁)